

大政奉還前後の 京都と同志社

こばやし たけひろ
小林 丈広 (同志社社史資料センター所長)

幕末の京都は、政変の中心として全国から注目を集め、文字通り、政治・経済・文化の中心となった。明治維新後の「東京遷都」による衰退が強調されることもあるが、幕末の活況の方がむしろ特別だったのである。

小文では、そうした幕末の京都における庶民の暮らしと、その後の同志社との関係について紹介してみたい。

Ⅰ．物価の高騰と天誅

図1は幕末の物価の動向をグラフにしたものである。残念ながら、京都のものではなく、大和国の庶民が記した記録をまとめたものではあるが、この時代の狂乱物価の様子をわかりやすく示している(谷山正道「幕末の社会情勢と地域知識人」『明治維新と思想・社会』有志舎、二〇一六年)。(図1)

このグラフによっても明らかのように、開港すなわち外国との本格的な貿易の開始が、物価高騰のきっかけになった。たとえば、高い品質がヨーロッパにまで知られていた生糸が、横浜などから多量に輸出されるようになると、国内では生糸

が品不足になって高騰した。その結果、絹織物の製造業者(織元)が生糸を仕入れることができなくなる。また、高い生糸で生産された織物の価格はますます高くなり、庶民の手が届かなくなる。一方、綿織物に関しては、機械織りの綿製品が大量に流入し、在来の綿産業が打撃を受けた。いづれにしても、不況下においては作ってもなかなか売れない織元は休業し、職人は失業した。失業した職人たちの中には、高騰した米や食料品を買うことができず、家財を売ったり、行き倒れになったりする人々もあらわれた。

こうした経済の激変は、貿易に対する怨嗟の声として巷にあふれ、開港に踏み切った幕府に対する批判や貿易で利益をあげた商人に対する反感を強めていった。かつてのバブル経済や昨今のTPP論議を持ち出すまでもなく、貿易環境の変化は、時流に乗った一部の人人々に莫大な利益をもたらすとともに、その恩恵を受けない大多数の人人々の間に大きな格差をもたらす。幕末には、物価高騰に伴う生活苦が、過激な攘夷運動を支えることになった。

丁字屋吟右衛門家に残る古文書によれば、次のような事件があったという。

文久三年（一八六三）七月二十三日のことである。三条大橋東詰の高札場に、張り紙があった。宛先は、三条東洞院西入るに住む丁字屋吟三郎、室町三条上るに住む布屋彦太郎・市次郎、葎屋町一条下るに住む大和屋庄兵衛で、昨夜、これらの人々が留守だったので、あらためて「天誅」を加えるつもりであるという（末永国紀「近江商人小林吟右衛門家の経営書簡集（抄）」十『経済学論叢』六〇巻

一号、二〇〇八年）。

張り紙は、この三家及び仏光寺高倉西入るの八幡屋卯兵衛が開港後の貿易で暴利を貪っており、それが物価高騰の原因であるとして、さらにこの四家以外の商人についても詳しく調べて根絶やしにするに締めくくられており、攘夷派から貿易商人に向けられた怨恨の深さが思いやられる。

それでは、この四家の中で、八幡屋だけがこの張り紙の宛先に記されていないのは、なぜであろうか。なぜなら、この

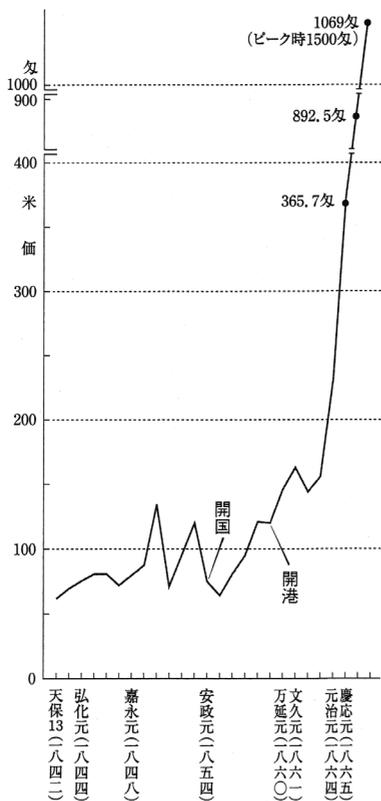


図1 幕末における米価の高騰
(谷山正道「幕末の社会情勢と地域知識人」『明治維新と思想・社会』所収)

近隣の町家から町家へと飛び火し、折からの北風にあおられて市中を巻き込む大火になった。いわゆる「どんどん焼け」（鉄砲焼けともいう）である。会津藩の砲兵隊を率いていた山本覚馬は、この戦闘で目を負傷したのが原因で後に失明したとの説があるが、ドラマでも負傷した場面が描かれていた。

侵攻してきた尊攘派にも、京都に駐留する諸藩にも、幕末の政情の中で発言力を確保するためという政治的目的があったが、京都の町人たちはそのとばっちりを受けることになった。蛤門のあたりから燃え広がった火は、東は鴨川、西は堀川、南は七条通の南側、それぞれの方向で町家が途切れるところまで、約二日間燃え続けた。

ドラマ「八重の桜」では、被災者救済のために行われていた炊き出しに並ぶ京都の町人たちが、大砲を放った会津藩士に対して石を投げつけるという形で、その関係が描かれていたが、戦争の責任は会津藩だけではなく、天皇を含めて幕末の政情の中で主導権争いを演じる政治勢力全体にあった。石は、武士や公家とい

った領主階級全体に向けられていたと言つて良いであろう。そこに割つて入つた松方弘樹演じる大垣屋清八は、そうした一般町人たちの中の顔役という立場と、会津藩用達として大名経済に依存する有力商人という立場という両面を体現していた。

3. 慶応二年～三年の救済

全国から諸藩士や志士、浪人らが上洛することで活性化していた京都経済は、どんどん焼けによって暗転した。しかし、禁門の変によって京都が幕末の政変の中心地であることがあらためて示されると、上洛の動きはますます盛んになる。町人もすぐに復興に立ち上がり、材木を含め、資材の高騰が進んだ。さらに、増加する人口をまかなうために米や炭など生活必需品の不足が顕著になり、他地域に比べても物価の高騰はより激しかったと考えられる。

一方、禁門の変後いつたんは幕府に対する恭順派が実権を握つた長州藩内部でも政争が繰り広げられ、再び幕府との対決を志向するようになる。この時、台頭

張り紙は八幡屋の首に付けられていたからである。八幡屋は昨夜、攘夷派にとらえられ、「天誅」にあつていたのである。

2. どんどん焼け

文久三年は、京都で尊王攘夷運動がもつとも盛んな年だったが、八幡屋が「天誅」にあつてから間もなく、八月十八日に政変が起こり、過激な攘夷派が掃される。逐われた人々は長州藩を頼つて西に向かった。攘夷派一掃には、孝明天皇と天皇の信頼が厚い会津藩、さらに薩摩藩などが大きな役割を果たした。

それに対し、翌元治元年（一八六四）七月、長州藩を中心とする攘夷派が巻き返しを図つて京都に侵攻してくると、会津藩・薩摩藩などと激しい戦闘となった。主たる戦場が蛤門など禁裏を取り囲む門の周辺であつたため、この戦闘は「禁門の変」と呼ばれた。

数年前に放映されたNHKの大河ドラマ「八重の桜」でも描かれているように、禁門の変では鉄砲や大砲が用いられ、攘夷派が潜伏している公家屋敷や長州屋敷への砲撃が行われた。戦闘による火花は、

してきた伊藤俊輔（のちの博文）らかつての攘夷派の中には、開国を容認する者もあらわれ、長州藩の政治的主張の軸が攘夷から討幕へと大きく転回していくことになった。長州藩内部の政変の影響を受け、幕府と長州藩との交渉が不調に終わると、幕府は再び長州との対決を余儀なくされる。

慶応二年（一八六六）、幕府を中心に長州征討の準備が始まると、西日本全域に影響が広がった。瀬戸内海には、外国船も出没しており、京都への物資の流通はさらに阻害された。結局、慶応二年六月に始まる長州征討は失敗に終わった。この同じ年に関東から東北地方にかけての穀倉地帯が冷害に襲われ、米価はこれまでにない急激な高騰を見せるようになる。しかし、長州征討の失敗と將軍家茂の死去、その後の処理に追われる幕府には、京都の町人の生活を顧みる余裕はなかった。

そこで、京都の町では町人自身による救済活動が活発に繰り広げられた。実はこの時の救済活動については、『仁風集覧』という書物が発刊され、同時代の人々

にもその内容が詳しく伝えられた。『仁風集覽』には、救済活動のために金穀を抛出した町人の屋号と名前、居住地、抛出资额が列記されている。一例としてその冒頭部分をあげれば、次のようである。

白米三拾五石 蛸葉師小川西へ入丁
池田屋長兵衛

そこで、『仁風集覽』に記された居住地をもとに抛出者の分布を地図にしてみると図2のようである。一見してわかるように、市内中心部、とりわけ三条通から四条通の間に抛出者が集中している。現在でも祇園祭の山鉦が集中するこの地域は、京都の中でも裕福な町人が数多く居住していたことがうかがえる。また、上京方面では西陣周辺、鴨川東岸方面では祇園周辺などにも多くの抛出者が見られる。【図2】

ただ、ここで思い出して頂きたいのは、三条通から四条通の間を含む市内中心部が、二年前のどんどん焼けで被災しているということである。すなわち、どんどん焼けで店や自宅を焼失し、復興途上に

あつた人々が、救済活動のために金穀を提供しているのである。

この中には、丁字屋吟三郎や布屋彦太郎の名も見える。文久年間には貿易で暴利を貪っているとして「天誅」の対象となるおそれがあつた商人は、こうした機会があれば、率先して金穀を抛出しようとしたことであらう。

また、大垣屋清八の名も見える。寺町竹屋町上るに居住した清八は、銀二貫目を抛出した。【図3】
こうして見ると、京都ではすでに、

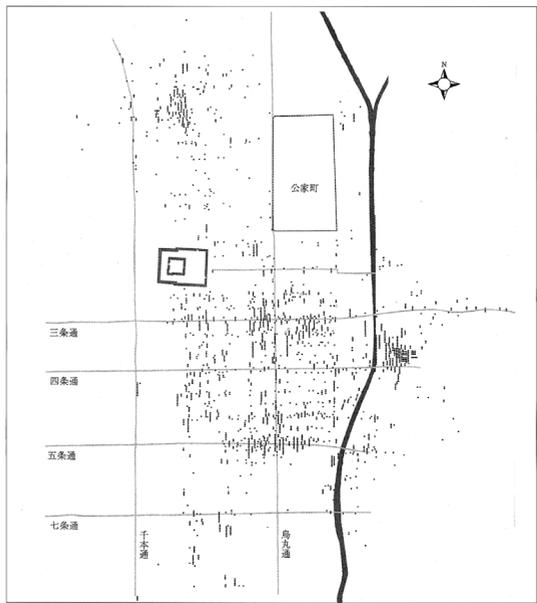


図2 慶応2年～3年金穀抛出者分布図
（「解題」「仁風」史料集成」別冊）

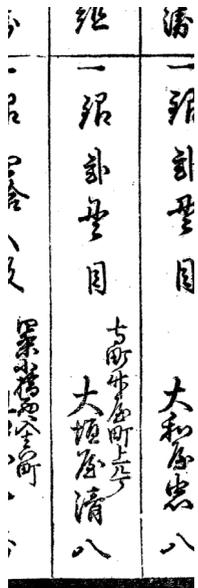


図3 『仁風集覽』
大垣屋清八の部分

幕府という存在がどんどん希薄になっていくことがわかる。慶応三年の大政奉還は、形式的には朝廷に政権を返すという意味であるが、その実、町人や農民を主人公とする新しい社会への扉を開くものであつた。町人らには、すでにその準備ができていたのである。

4. 京都町人と同志社の創立

『仁風集覽』に記載されている人々の中には、たとえば、次のような者もいる。

銀1貫目 鷹ヶ峰光悦丁
松屋新九郎

嘉永二年生まれで、慶応元年に代々鷹ヶ峰村の庄屋をつとめた松屋の家督を相続し、新九郎と名乗ったこの人物は、維新後は松野新九郎として大区小区制や地租改正、学区、社倉など近代的な諸制度の導入にあたり、区長や幹事などに就いた。さらに、一八七九年に京都府会議員に当選、自由民権派議員のまゝと役として府会副議長をつとめる。この時、初代府会議長に就任したが、元会津藩士で、

同志社を創立した新島襄の妻八重の兄として知られた山本覚馬であつた。最初の府会の様子は、大河ドラマ「八重の桜」でも描かれているが、盲目の覚馬に肩を貸すようにして支えたのが松野新九郎（俳優は吉田智則）であり、覚馬が議長を辞した後は第二代の府会議長となつたのである。

また、一八八三年頃から本格化する同志社大学設立運動では、西村七三郎、安本勝二、内貴甚三郎、市田文次郎、中村栄助などといった有力商人が発起人となつた。前述の『仁風集覽』には、西村七三郎の先代が伏見屋七三郎、内貴甚三郎の先代が銭屋清兵衛、中村栄助の先代が河内屋栄助として記載されている。また、安本勝二は角屋利兵衛、市田文次郎は近江屋文次郎本人ではないかと思われる。いずれも幕末の救済活動に金穀を抛出した有力商人であり、こうした人々が新島襄の活動を支援したことで、初めて同志社が京都の地に根を下ろしていく手がかりをえたのである。

というのも、同志社創立以来の支援者であつた中村栄助は、京都商工会議所や

京都市議会などでも熱心な活動を続け、一八九〇年に行われた最初の衆議院議員選挙で当選することになるが、その際にも、同じ地域を地盤とする仏教勢力や遊廓経営者などは中村の対立候補を推して対抗した（小林丈広「第二回衆議院議員選挙前後の京都」『同志社談叢』三二号）。また、前述した大垣屋清八は明治三年、狭客大垣屋音松の子善助を自らの養子にした。善助は養家を継いだ後、寺町丸太町で米穀商や古道具商を営んでいたが、同志社に近かつた縁からか新島襄と親しくなり、一八七七年に洗礼を受けた。名うでの狭客清八も、善助の影響を受けてクリスチャンになったと伝えられる。時計や自転車の輸入・製造を手がけて成功した善助は、京都電灯や京都電気鉄道などの会社経営に乗り出し、市内を走る路面電車の発展に尽くした。大沢善助は一八九四年まで、中村栄助は一九三八年まで長寿を保つたが、京都社会に同志社が定着していくためには、幕末維新时期を生きたこれらの有力町人の協力が不可欠だったのである。